授業改善につながる教員の気づきと態度の変容

ーアクション・リサーチをとおしてー

高校教育研修課　指導主事　泉　惠美子
高校教育研修課　指導主事　高橋　信之

要旨

本研究は、約半年間アクション・リサーチに取り組みながら授業改善を目指し、授業の省察を行う中で、教員が生徒との相互関係において、生徒や授業の何に気づき、それによって教員の態度がどのように変容していくのか、また授業や生徒がどのように変わるのかに焦点をあてて分析したものである。研究の手法としては今年度の「英語科教育研究講座」をとおして、事例並びに受講者へのアンケート調査と各受講者の研究のまとめを分析し考察した。アクション・リサーチは、指導力の向上をめざす教員研修において有効な手立てであり、特に教員の意識の高揚とそれによる態度の変容が授業改善に資するとともに、教員の継続的自己啓発につながることが明らかになった。

はじめに

平成14年7月に、文部科学省から「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想ー英語力・国語力増進プランー」[1]が出され、続いて平成15年3月「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」[2]が示された。その中で、中・高等学校の全英語教員対象に今年度から英語教員集中研修が5年間の計画で開始され、生徒の実践的コミュニケーション能力育成のために英語教員の英語運用能力と英語指導力の向上を図るよう明記されている。

英語教員研修の重要性が注目を集めているが、実際に教員が社会のニーズや、勤務校、生徒の実態をつかみ、なぜ研修が必要であるのかを自問し、自らの意志で自己研鑽に励むことが必要であると考える。当研修所で今年度実施した「英語科教育研究講座」では、最終的に教員自らの教師観、生徒観、学習観、授業観等が変わることを目指して、昨年に引き続き、アクション・リサーチによる授業研究に取り組んだ。

さらに、本県が策定した「美しい兵庫の教育を担う教職員のパワーアッププラン」[3]でも教員の資質向上が課題になっており、本研究では教員の資質として大切な要素である KASA：knowledge(知識) awareness(気づき), skill(技術), attitude(態度)の中でも、特に awareness と attitude を中心に研究することにした。昨年度のアクション・リサーチの研究では、教員が授業分析を行い、課題を明確にし、その解決を目指すことで自己の内的変化とともに授業改善が進むことが明らかになった[4]。本研究は、昨年度の研究成果を踏まえた継続・発展研究であり、個々の事例を取りあげ、具体的な教員の気づきとそれに伴う態度・行動の変容によって授業がどのように改善されるのかを中心に考察した。

1　教育におけるアクション・リサーチの取組

(1)　アクション・リサーチとは

教育におけるアクション・リサーチとは、教員が主体的に行う研究で、指導や学習についての理解を深め、教室での実践に変化をもたらそうとするものである。そして、教員が授業で教えながら小規模な調査や実験をし、授業の評価や反省を行い、自らが抱える問題を解決し、それをサイクル的に繰り返し、指導力を高めることを目的とするものである。

主な局面としては、計画立案(Planning)、アクション(Action)、観察(Observation)、省察(Reflection)がある。(Richard and Lockhart 1994)[5]

①　アクション・リサーチの特徴

アクション・リサーチの特徴は、教育がいかに行われているかを明確にでき、教員の KASA を探ると共に、教員自身の授業観・生徒観・授業スタイルに変化をもたらすところにある。研究対象は教育現場のすべてであり、

授業や教育環境での問題点に焦点をあて、実践をとおして行う研究で、教育実践から省察を繰り返しながら、教員が自らの理論を構築できる。また、各教員の現状から研究を開始して実践を行うことにより、自己啓発型の教員を育成することが可能となる。

② アクション・リサーチの基本的枠組み

授業研究の理論的枠組としては、実験群、統制群、プレテストおよびポストテスト、統計処理などを伴う実験型（量的研究）、観察法による記述データなどを用いるエスノ法（質的研究）、そして現場対応の折衷型ともいえるアクション・リサーチがある。1980 年代半ばより、質的研究が増え、研究者としての教師の省察を重視するアクション・リサーチが広がりを見せている。

③ アクション・リサーチの手法

アクション・リサーチの基本的手法としては、

(1) 問題点・課題の特定
(2) 問題点・課題に関するデータ収集
(3) 改善策の検討(Planning)
(4) 改善策の実践（Action）
(5) 改善策に関するデータ収集と分析
(6) 分析結果に基づくリフレクション(Reflective observation)と概念化(Abstract Conceptualization)
(7) 新しい概念による新たな問題点の特定

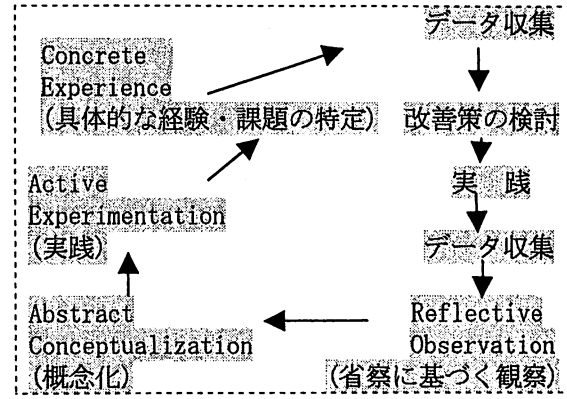

図１　アクション・リサーチの手法

となっている。一連のリサーチの中から新しい概念が生まれ、それにより実践を行い、その中から新たな課題を特定していくというように、スパイラル的に繰り返されて次のステップへと高められ、自己探索と授業改善を目指していくことになる（図１）。特に、具体的な経験から始まり、授業中の活動や生徒、教員自身をよく観察することが重要である。例えば、板書や発問の仕方で生徒の反応はどのように変わるのか、宿題や課題の与え方、声のトーンや大きさはどうか、教員の発話回数、学習者の発話回数、教員の立ち位置といった指導技術の細かな点から出発しても良い。生徒も教員も授業も同じものは二つとない。その中から、教員の言語観、教師観、生徒観、学習観が明確になり、自分自身の理論が構築されるような授業をしなければならない。そして様々なことに気づくと、それに対応できるように適切に意志決定を行い、臨機応変に対応することが大切であり、その積み重ねが徐々に授業改善につながっていく。

④ データの収集と分析

データの収集と分析はアクション・リサーチのコアな部分であるが、データの種類は、研究の中心となるジャーナル(教授日誌)、生徒との面接法、質問紙法、ビデオと分析法＜Transcripts、Stimulated Recall (Think-aloud protocol)、Categorizing、Seating Chart Observation Record＞などがあり、少なくとも 3 種類以上は集めたい。

(2) 本研究における仮説の設定

本研究にあたり、以下の３つの仮説を設定した。昨年度の研究結果からアクション・リサーチによって教員に内的変化がおき、授業改善ができたことは立証されたが、更に詳細にどのような気づきが起こり、変化がもたらされるのか、その変化によってどのように授業が改善されるのか、それがどのように教員の自己研鑽につながっていくのかに焦点を当てて考察したい。

① 省察による教員の気づきによって生徒観、指導観に変化がもたらされる。
② 教員の生徒観、指導観の変化が態度の変容につながり、授業が改善される。
③ 省察とそれにもとづく改善を繰り返す中で、教員が自分の授業や生徒を観察する力がつき、自己啓発が促進される。

(3) 平成 15 年度英語科教育研究講座の概要

当研修所の今年度の現職教員研修講座の「英語科教育研究講座」においてアクション・リサーチに取り組ん

だ。受講者は公立中学校英語科教員5名、県立高等学校英語科教員10名等、計17名であった。5月から11月の間に、3回の全体研修と継続的な個人の課題を中心とした研修を行った。アクション・リサーチに関する講座の概要を次に述べたい。

① 事前指導と課題（4月下旬）

講師を依頼した大阪学院大学の伊勢野薫教授と本研究講座の内容と流れに関する打ち合わせを行い、それに基づいて、受講者へ課題(Teaching plan 作成とビデオ撮影)を提示した。特に、指導案にはその1時間の教員のねらいや目的を明確にし、その目的を実現するための手法について仮説(assumption)を立てるとともに、なぜそれをするのか(教員の行動、指示等の目的・ねらい・意図を具体的に)、どのようにするのか（方法を具体的に）を考えて叙述すること。また、授業後に振り返りを行い、実際に授業をしてみて感じたこと、思ったこと、気づいたこと、どこがうまくいったのか、うまくいかなかったのはなぜか、生徒の反応などを詳細にジャーナルに記載してもらった（**参考資料1**）。そのことによって、授業前、授業中、授業後でどのような変化が教員自身に見られたか、またそれによって生徒がどんなふうに変わったかをしっかりと観察・分析する視点と技術をつけてもらうことを主なねらいとした。同時に、指導案にそった授業のビデオを撮影して提出してもらった。またアクション・リサーチに関するアンケートにも回答してもらった。目的は、事前に受講者の授業に関する問題点や課題、ニーズを知り、受講者の研究への意識を高めることであった。その結果、改善したい課題として、生徒がやる気になる授業、わかりやすい授業の展開、生徒に英語力をつけさせるための工夫等が出された（**参考資料2**）。

② 第1回研究講座（5月22日・23日）

アクション・リサーチについての理論的な講義に続いて、アクション・リサーチの意義、目的、方法、指導案とジャーナル、ビデオ、質問紙法、面接法などによるデータ資料収集などの説明と、事前課題に関するフィードバックを行った。そして生徒のアンケート結果などを参考にして、望ましい教員と望ましくない教員の分類を行うとともに、ペアで理想の外国語教員像について話し合い、自作のイラストを用いて発表した。カウンセリングの技法を取り入れたその活動では、自分達の外国語教員に対するイメージと実像を明確にすることがねらいであった。

その後、各受講者がアクション・リサーチのテーマを決定し、研究を開始した。研究テーマは、生徒の自主的な活動を促す授業、読解授業の改善、音読指導、学び合う集団作り、実践的コミュニケーション能力をつけさせる授業など、受講者の担当する学校や生徒の実態によって多岐にわたった（**参考資料3**）。

その後の研究では、必ず対象クラスの授業の指導案と、ジャーナルをつけること、ビデオを撮ったり、アンケートを実施するなど、複数のデータを集めて各自が課題を見つめ、授業を改善することを強調した。各地域でペアあるいはグループを作り、情報やジャーナルの交換ができ、悩みが出せ、討議が深まるようなシステムを準備した。そのシステムを有効に活用することによって研究の幅が広がり、質が高まることを目指した。また伊勢野教授と筆者2名を含めたメーリングリストを作成し、いつでもサポート体制が取れるようにした。

③ 第2回研究講座（7月22日・23日）

アクション・リサーチの中間発表を行った。その際、伊勢野教授からフィードバックがあり、受講者は各自の授業改善につながる更なる課題を設定していった。また、アクション・リサーチに取り組む授業クラスを決め、その授業計画と月間報告、ジャーナルを月初めと月末に提出することを義務づけた。

④ 第3回研究講座（11月11日）

アクション・リサーチの最終報告として各自で研究の成果をまとめて、パワーポイントを用いて発表し、互いに質問やコメントをしあった後、報告書を提出した。最後に研修の感想を自由記述してもらったが、それによるとアクション・リサーチを取り入れた授業改善に肯定的な意見が圧倒的に多く、自分の授業を見つめる良い機会になったとの意見が見られた。

2 アクション・リサーチによる教員の変容

実際にアクション・リサーチをとおして、どのような気づきがあり、態度が変わったのかを2つの具体例をとおして、検証してみたい。

(1) 事例１　中学校のＡ教諭の実践：テーマ「学び合う仲間作り」「実践的コミュニケーション能力の向上」

① 生徒の実態

担当している２年生は、比較的人なつこく穏やかで明るい生徒の多い学年である。生徒の実態を観察すると、次のような問題点が見つかる。

・すでに英語に苦手意識持っているものが多い	・授業に積極的に参加できない
・音読練習の声が小さい	・忘れ物が多く、宿題もあまりしてこない

② テーマの設定　「学び合う仲間作り」「実践的コミュニケーション能力の向上」

問題点を解決するには、生徒を「学び合う仲間」にしていこうと考えた。基礎・基本を大事にし、英語を苦手に感じている生徒が居心地よく学べる空間を作ろうと考えた。

また教員になって 12 年目であるが、授業では特にコミュニケーション活動に力を入れてきた。活動に取り組んでいる生徒たちは生き生きとしている。コミュニケーション活動から実践的コミュニケーション能力を育成することができると考える。生徒たちが楽しんで活動に参加できるようにしたい。

③ 改善策の実践と考察１（1 学期）

ア　実践

(ｱ)　二人一組のペアにし、座席も教員が指定

全員が参加する授業を心がけて、生徒を二人一組のペアにし、座席も指定することとする。お互いに責任をもたせ合うことで、学び合う仲間になる第一歩を踏み出せるのでないかと考えた。わからないことはすぐに隣のペアに尋ねることで、学習に積極的になれる。音読でも声を出しやすくなると考えた。

(ｲ)　CHAT TEST を実施

生徒が ALT と 1 対 1 でちょっとした会話をする時間を設定した。そのようすをビデオに撮影し、会話を書き出して一人一人に返した。ALT や他の英語教員と一緒に評価規準を設定して評価を行った。

イ　分析・考察（ジャーナル・生徒面接より）

仲のよい生徒二人一組でペアを作らせ、机を向かい合わせにして座らせた。座席は視力の悪い生徒に気を配りながら、英語が苦手な生徒が前の席になるようさりげなく配慮した。ペア作りも座席の移動も思ったよりスムーズにいった。お互いにチェックし合ったり、教え合ったりして一生懸命取り組んでいる。慣れるにしたがい、少しずつ雑談が増えてくるのが気になった。

６月から、新出語句や本文を学習するときは机ごと前を向くように指示し、ペアでの活動と個人の学習を分けることにした。生徒たちの楽しそうに学びあっている様子を見る限りでは、ペアを作って座席を指定したことがうまくいっているように感じる。

マイナス面としては、(1)ペアが休んでいるときはどうしようもない　(2)うるさくて作り直さないといけないペアがある　(3)英語が苦手な者同士ではなかなか学び合うことができないということがある。

英語が苦手な生徒にとっては、教室が居心地の良い空間になった。期末テストでは、中間テストで 50 点以下だった生徒の点数の上昇が顕著に見られた。

CHAT TEST では、ALT と 1 対 1 で話すのは今回が初めてという生徒がほとんどで、緊張していたが、自分の英語が通じることの喜びが大きかったようである。「もう一回しよう」「今度はもっと長い時間で挑戦させて」という生徒の反応に、準備・フィードバックに時間をかけた甲斐があったと感じた。CHAT TEST をしたことが、生徒にとって実践的コミュニケーション能力を向上させるための意欲付けにつながった。これからもこのような活動を続けていき、生徒の意欲を持続させていきたい。

＜アンケート結果＞

（固定ペアと座席指定について）　よい 75%　悪い 21%　無回答４%

・楽しく気楽に質問できる　・今まではわからないところはそのままにしていたが、教え合ったらわかるようになった
・積極的になった。友達に聞いたりできるので授業がやりやすい　・ペアとすぐに練習を始められるので良い
・うるさくて集中できない　・ふざけてしまう。勝手なことをしている
・苦手な人には良い機会と思うけど、授業に集中できない

(CHAT TEST について)
・難しかったけど楽しかった。またやりたい　・初めての体験なので緊張したが、とても良い勉強になった
・次は先生にヒントを出してもらわなくても質問に答えられるようにしたい
・習った英語をあれこれしゃべれるとすごくうれしかった　・英語をもっと勉強してわかるようになりたい

④ 改善策の実践と考察２（２学期）

ア 実践

(ｱ) ペアと座席の変更

ペアの作り直しと座席の変更を行う。英語が得意な者と苦手意識をもっている者がペアになることが望ましいということだけを伝えた。１学期の反省を踏まえ、うるさくならないように座席も配慮した。

(ｲ) 和訳先渡しの実行

日本語訳、新出単語・重要語句をプリントにまとめたものを生徒に渡して授業を進めた。そうすることで①「授業中にノートをとることに必死になり、説明が聞けない生徒をなくすこと」、また、板書と説明をノートに書き写すための時間を短縮して、そのかわりに②「コミュニケーション活動にあてる時間を長く取ること」を目指した。

(ｳ) 英語の歌の導入

文法や英語の生きた表現などを学ばせるために、英語の歌を取り入れた。楽しみながら学び、達成感を与え、それが実践的コミュニケーション能力の向上に結びつくと考えた。

イ 分析・考察（ジャーナル・生徒面接より）

個人から同性のペアへ、そして男子ペアと女子ペアを組み合わせた４人以上のグループへと活動を広げてみた。机の向きもその都度変えることで、生徒の気持ちも切り替えることができた。ただ、英語が苦手な者同士のペアは活動があまりうまく行っていないことが気になる。しかし、「楽しみながら結構簡単に覚えられた」「あっという間に 50 分が過ぎた」という生徒の感想がとてもうれしかった。生徒に助けられている。

和訳先渡しは高校での実践例を参考に、中学生用にアレンジしてみた。違った授業の形態を試すことがうれしい反面、まだ十分検討しきれていない方法でうまくいくのか不安でいっぱいであった。慣れない方法に舞い上がってしまい、気がつけば授業が終わっていたという感じだった。指導案を見ながら授業を進めることでテンポの悪い展開になった。今後は自分なりのやり方を考えていきたい。

２年生が２学期に学習する文法がたくさん含まれているカーペンターズの歌を聴かせた。生徒はとても気に入ったようで、うまく歌えるようになった生徒が何人もいた。うれしかった。

⑤ 実践者のまとめ

毎回指導計画を作成し、準備をしっかりして授業に臨み、反省することによって授業が積み上げられていく過程がよくわかった。大変だったけれども、一生懸命授業をやってきたことを生徒はよく見てくれている。生徒との良い関係ができ上がってきたように思う。実践的コミュニケーション能力がつくような活動を引き続き考え、教材などもどんどん作成していきたい。

⑥ 事例１にみる成果と課題

「学び合う仲間作り」をテーマに設定して、ペア活動における生徒同士の相互援助（ピア・サポート）を重視し，それが行われやすいような座席の配置や向きを工夫している。

Ａ教諭は、生徒に相手の選択を任せたペア作りがうまくいくかどうか心配していたが、「思ったよりスムーズに」いき、「一生懸命取り組んで」「楽しそうに学び合っている」生徒たちのようすに、「うまくいっているように感じている」。アンケートでも 75%の生徒がペアを作ることを「よい」と答え、特に英語が苦手な生徒の成績向上という点で成果をあげている。しかし「慣れるに従い、少しずつ雑談が増えてくるのが気になり」、２学期は「うるさくならないよう」配慮してペアと座席の変更を行っている。活動の目的に合わせて「机の向きもその都度変えることで、生徒の気持ちを切り替える」というような改善を行っている。

A教諭は、座席の配置や向きが適切かどうかをジャーナルやアンケートによって生徒の反応から判断し、「生徒の感想がとてもうれしい」と述べている。そこには教員の主観だけで判断せず、常に生徒のためという姿勢がうかがえる。また次の２点において成果が見られる。

○　教員・生徒のより良い関係

「生徒が居心地よく学べる空間」を目指したペア作りや、「実践的コミュニケーション能力の向上」を目指したChat testやグループ活動などに取り組み、その経過をジャーナルや面接をとおして観察しながら授業改善を行ったこの実践では、生徒に英語の楽しさと面白さを伝えるべく、自ら工夫を重ねて授業研究に取り組む教員の姿勢が生徒にも理解され、それが生徒・教員間のより良い関係を築くことにつながっている。そして「生徒の意欲を持続させていきたい」「実践的コミュニケーション能力がつくような活動を引き続き考え、教材などもどんどん作成していきたい」という、教員の次の取組みへの原動力となっている。

○　新たな挑戦

和訳を先に渡すなど自分が慣れた授業のやり方を変えたり、英語の歌を導入するなど新しいことに挑戦したりするのはなかなか難しいことである。また、このままで良いのだろうかという気持ちがあっても、実際にどう行動を起こしたらよいのかがわからない場合もある。A教諭は、「実践的コミュニケーション能力の向上」のために、仮説、実践、観察、省察というステップを踏むことで、今までの自分のやり方を振り返り、自分の教える生徒に合わせてChat testをはじめとする新しい指導法や活動を導入しながら授業改善に取り組んでいる。つまり、気づきから行動へ、そして恒常的な自己探求へとつながっている実践例といえる。

(2)　事例２　高等学校のＢ教諭の実践　テーマ：「効果的な音読活動を考える」

①　現状、問題点の分析

落ち着いた雰囲気で授業を進めることができるが、生徒の反応が乏しく、活気がない。音読の際にほとんど声が出ない。説明は熱心に聞くが音読に入ると教員の声だけが響いている。

②　テーマの設定

「効果的な音読活動を考える」：音読活動に活気を出すことが、授業全体の活気につながる。読む力を伸ばすことにより、生徒の英語力の向上につながる。

③　改善策の実践とデータの分析１（６月・７月）

ア　実践　「コーラスリーディングを発展させた音読活動に取り組む」

(ｱ)　コーラスリーディングの合間に個人指名

緊張感を持ってコーラスリーディングに取り組ませるために、また、生徒がどれくらい読めているかを教員が確かめるために、コーラスリーディングの合間に個人指名を行った。

(ｲ)　ペアリーディング

ペアで練習することによって必ず声に出して読まなければならない。わからないところは相談し合って練習できる。

イ　データの分析

・アンケート結果：「教科書を音読できる」	25%	「読みの練習は大切だと思う」	56%
「教科書を読めるようになりたい」	56%	「家で音読の練習をしている」	3%

・ジャーナル：生徒には、個人指名をされるかもしれないという緊張感があり、よく読めていると感じた。ペアリーディングのときはよく声が出ており、活動中に机間巡視をしてどれくらい読めているかを確かめることができた。

・ビデオ分析（伊勢野教授）：教員のあとについてのコーラスリーディングでは、生徒の声がほとんど出ていないし、教員から声を大きくするような指示もない。リピートの最中にいきなり生徒を指名して言わせたり、そのあとのペア練習のときに教員がVTRの操作をしたりしている。それは「音読」はさほど重要ではないというメッセージを教員が生徒に送って、生徒がそれを本能的に感じ取っていると

考えられる。教員の言語観が微妙に影響している。なぜ声が出ないかを探ってみる必要がある。コーラスリーディングの合間に個人指名を入れることで「緊張感が出てよい」とジャーナルに書いてあるが、本当にそうだろうか。生徒からすれば読めるかどうかわからないし、自信もないときにみんなの前で「読まされる」のは苦痛ではないだろうか。「読みの練習は大切」「教科書を読めるようになりたい」という生徒の気持ちを生かす方法を探ってもらいたい。

④ 改善策の実践とデータの分析２（９月）

ア 改善策の実践 「自信を持って単語・熟語を音読できるようにする」

自分ではよいと思っていたコーラスリーディング中の個人指名は、生徒に圧迫感を与えるという指摘もあり、やめることにした。文全体の音読に進む前に、単語レベルの音読を自信を持ってやれる状態に持っていくことから始めようと考えた。

(ｱ) フラッシュカードを使用した単語の導入

読む回数を増やし、生徒の顔を前に向かせて声を出やすくする。

(ｲ) スラッシュ・リーディングの導入

必要に応じてスラッシュを本文中に書き込むことで、意味を考えて文の切れ目を意識するように指示し、自分で音読の練習ができるようにする。

(ｳ) ペア読みの継続

教員もペアに入り一緒に読むことで、生徒は音読が大切な活動だと感じられるのではないかと考えた。

イ データの分析

・ジャーナル：文を音読するときに、単語レベルでつまることが少なくなった。生徒が、イントネーションや文の切れ目を意識して読もうとしている様子が感じられた。生徒のペアに入って一緒に読むと、読み方について質問する生徒が出てきた。効果があると考えられるが、この時点での取組みを評価するデータがなかったことが反省点である。

⑤ 改善策の実践とデータの分析３（10 月）

ア 改善策の実践 「自信を持って単語・熟語を音読できるようにする」（継続）
「音読への意識を高めるための目標を設定する」

(ｱ) フラッシュカードを使用した単語の導入

継続して行う。あまり数が多いと緊張が途切れるので、難しいものを精選する。

(ｲ) 音読チェックポイントの提示

声の大きさ、読みの正しさなどチェックするポイントを生徒に示し、教員による「音読チェック」の時間を設けることを告げる。「音読チェック」に向けて自分で練習できるように、書き込みを行うことを指示し、意味を伝える読み方を生徒に意識させた。

イ データの分析

・ジャーナル：フラッシュカードを使用した単語の導入のあと、すぐに本文の音読をすれば効果があるが、次の時間に音読をすると忘れてしまっているようだ。定着を図ることが課題である。また、意味を伝える読み方やアクセント等について、意識して音読していることが感じられた。

正しく読めているかをチェックする際に、細かく採点する必要はないかもしれないとの迷いが出たが、「聞き取りにくかった」とコメントを入れて返却することもあった。教員が授業中に確認したところを生徒が意識して読もうとする姿勢が感じられたなら、効果が上がっていると判断した。

・アンケート結果：	「教科書を音読できる」 25%	「読みの練習は大切だと思う」 79%
	「教科書を読めるようになりたい」 68%	「家で音読の練習をしている」 53%

⑥ 実践者のまとめ

「音読チェック」を行うと宣言したが、教員側の自己満足に終わるのではと不安もあった。しかし感想には、「音読練習は単語の読みや文の区切るところ、イントネーションなどがわかるよい機会になった」と生徒が教員

の意図を理解して取り組んでいたことがわかり励まされた。

音読テストでは生徒を緊張させると思って、呼び名を「音読チェック」にしたが同じだった。グループで読ませ、お互いに採点しあい、教員が順番に１つのグループに入って採点するという方法をとると緊張を減らせることがわかった。

生徒の感想に「やっても意味がないと思っていた」とあるように、音読に真剣に取り組めなくしているのはこれまでの授業に責任があるのだと思った。自分は生徒にどのような力をつけようとして英語の授業をしているのか。授業を変えようとするためには、教員である自分の意識の変化がなければいけないのだと気づかされた。継続して課題を設定し、授業の改善に取り組むことが教員としての自分に必要なことだと感じさせられた。

⑦　事例２にみる成果と課題

授業中に生徒に音読をさせようとしても、ほとんど声が出ない。Ｂ教諭は、コーラスリーディングの合間に「個人指名」を入れることで、生徒は「緊張感を持って」音読に取組み、改善できると考えた。しかし、その授業をビデオに撮影し分析した結果、「読めるかどうか自信がないのにみんなの前で読まされる」ことが生徒にとって「苦痛」になっているのではないか、そのために「生徒の声が出ない」のではないかという指摘を受ける。

Ｂ教諭は、「生徒に圧迫感を与える」ので「自分ではよいと思っていた個人指名」をやめる。そして、なぜ声が出ないのか、どうすれば声が出るようになるのかを考え、生徒が「自信を持って」音読ができるようにすることが大切だと気づく。そのためには、「単語レベル」で確実に読めるようにすること、到達目標を示して「生徒が自分で練習できる」ようにすること、ペアを組ませて「声を出すことが必要」な状況を作り出すこと、それによって「音読が大切な活動」だと生徒に意識させるよう取り組んだ。アンケートで「家で読みの練習をやっている」と答えた生徒の割合が３％から53％に変わった。

自分の授業をビデオに撮影し分析するのは気の重い作業である。しかし教員の気づきを促すには最適の方法である。自分の授業の問題点がはっきりと写し出され、客観的に振り返る機会が与えられるからである。指導案のねらいが、授業で実際に達成されたのかを第３者から助言を受けることも可能となる。その省察が次のアクションへとつながる。

音読の声を出させるには、生徒に音読が大切であるという意識を持たせなければならない。ところが「自分の授業では無意識のうちにそれとは逆のメッセージを発していたのではないか」と気づいたところからＢ教諭の「意識の変化」が始まった。自ら課題を見つけ、授業改善にむけて自己変革を続けていく教員の姿を見出すことができる。

３　全体のまとめと考察

半年間のアクション・リサーチをとおして、教員のKASA(Knowledge, Awareness, Skill, Attitude)にかかわる部分で一人一人の省察が行われ、その変化の過程がジャーナルに如実に現れている。その結果、授業改善の点でかなりの成果が現れている。特に以下の観点において、その変化を認めることができる（**参考資料４**）。

- Student-centeredness、Empathy、whole persons、Security（学習者中心、共感、全人、安心）
- View of Language（言語観）
- View of Teaching / Learning（教授観、学習観）
- Objectives as Teacher（教員としての目標）
- On-going / Structured Feedback and Interview（フィードバック）
- In-class Modification（授業中の意志決定）
- Logistics（授業運営）
- Self-fulfilling Prophecy & Teacher Expectation（自己完結予言と教員の期待）

また、最終的なアンケートでは今回の研究講座の受講者全員が、自分の授業観・生徒観に変化があったと回答しているのも注目すべき点である。次に仮説の検証をしてみたい。

(1)　仮説１　＜省察による教員の気づきによって生徒観、指導観に変化がもたらされる＞

仮説１に関して、ジャーナル並びに最後の感想から、次のように分析できる。

「学習者中心、共感、全人、安心」「言語観」「教授観、学習観」「教員としての目標」の項目で見られるように、

今まで気づかなかったこと、生徒の態度や反応に気づいていく過程が認められる。例えば、以下のような感想が見られた。

・「生徒が○○できない」という意識から「自分がどうすれば生徒が○○できるようになるか」という意識に変わった　・生徒の視点に立つことの大切さに気づかされ、生徒がどんな活動を望んでいるかよくわかった　・多くの生徒は何とか英語の力をつけたいと考えており、教員の働きかけに素直に反応している。そんな生徒の反応を見て、ともに授業を作っていくべきだと思った　・指導案はたんに授業の進行を書くためだけのものではなく、自分が何を目的として教え、目的の達成度をはかるためにも必要なのだと感じた　・授業の中身は分かっていることばかりでも、分からないことばかりでも面白くない。その兼ね合いを考えながら教師自身が常に challenging であることに尽きると思う　・自分の授業を「見る目」（授業鑑賞眼）と自分は課題解決のために何をすればよいのかを考え、実行する力の必要性をつくづく感じた

このことから、教員が生徒を全人格でとらえ、授業をモニターし、省察することによって様々なことに気づくとき、教員が今まで無意識に抱いていた生徒観、指導観に何らかの変化が生じたといえる。そして教員が授業改善をしたいという意識を持つことで、生徒の変化に対しても敏感になってくると考えられる。

(2)　仮説２　＜教員の生徒観、指導観の変化が態度の変容につながり、授業が改善される＞

仮説２に関しては、同様に「フィードバック」「授業中の意思決定」「授業運営」「自己完結予言と教員の期待」「意味と目的が明確な教材」において見られるように、教員の気づきが授業中の態度の変化に現れ、授業を改善しようとする行動に結びついていることが分かる。例えば、

・生徒一人一人を大切にするようになった　・生徒にフィードバックする機会を意識して持つようになった　・授業は「生徒を成長させるもの」というとらえ方をするようになった　・訳読式の授業から脱皮できるチャンスとなった　・教員の自己満足になりやすい授業展開に気をつけ、生徒の視点に立って授業方法を考えた　・授業中に英語で指示することが苦痛なくできるものだとわかった。これからもできるだけ英語を使いたい　・教室での学びの形態を変え、生徒間、教員・生徒間の関係が大変深まった　・教師側の「意識改革」は一つの大きな成果である。新 ALT と５名の日本人教員には「チーム」としての意識が生まれ、授業後の情報交換を頻繁に行い、クラス間に不公平の少ない授業展開ができた　・「自分にできることしかできないのだ」と奮い立たせながら、以前なら工夫しなかっただろう、いくつかの点を授業に生かすことができた

とあるように、教員の生徒観、指導観の変化が態度の変容につながり、自分の殻を破ることで、少しずつ授業が改善したと考えられる。「教室にいくのが本当に楽しいと思えることが、教員として大きな誇りとなっている」とも記載されている。

(3)　仮説３　＜省察とそれにもとづく改善を繰り返す中で、教員が自分の授業や生徒を観察する力がつき、自己啓発が促進される＞

仮説３に関して、今まで授業や自分の指導法に疑問や課題を感じていても、どうすることもできなかった受講者も、アクション・リサーチをとおして授業分析眼を持ち、やり方を身につけることができた。そして、今すぐに授業改善に結びつくような実践ができなくても、意識の変化や気づきにより、いずれは着実に実力につながり、教員の指導力が身につくと推察される。そのため、教員研修のあり方として、単なる技術指導や知識の習得を目指した研修ではなく、自己鍛錬・自己啓発につながるものが必要であると考える。感想を見ても一段階成長した教員の姿を認めることができる。

・授業を感覚ではなくデータで客観的に観察していくことが大切である　・課題を自分に課すことができるようになれば次へ進んでいけると思うので、継続していきたい　・授業改善を真剣に実践しようとしている自分を知ることができ、今後も意欲を持って取り組んでいけそうだと感じられた　・講座は終わってしまったが、自分なりの研究を続けていこうと思っている　・チャレンジするという姿勢の大切さが身にしみてわかった　・継続してリサーチを続けていかないと良い授業を行うことはできないと感じた

客観的省察とそれにもとづく授業改善を繰り返す中で、教員が自分の授業や生徒を観察する力がつき、自己啓発を促進する。つまり、アクション・リサーチはその場限りのものではなく、教員である限り続けていくものであると考える。

4　今後の課題

今回の研修を通じていくつかの問題点が浮き彫りになった。今後の課題としたい。

(1)　時間の確保とデータ収集の簡略化

受講者から毎日の校務が多忙を極め、ジャーナルをゆっくり記載したり、授業を振り返る時間がなかなか取れないとの声がよく聞かれた。ジャーナルは研究の中心となる部分で、ないがしろにはできないが、指導案に仮説を書いておき、授業後５分程度ですぐにかけるようなフォーマットと習慣づけが必要だと感じた。その方法を提示はしたが、慣れるまでには時間を要することが分かった。

(2)　ジャーナルの記載事項の精選と授業のねらいの明確化

ジャーナルを書き続けたが、残念ながら変化が見られないケースがあり、個人差があった。仮説の立て方、分析の視点、内省が充分でなかったり、論理的に考えたり先を見通したりする力が弱かったりすることも考えられるが、サポートする側の問題ともいえる。問題を洞察し、新たな視点を見つけていく訓練や方向付けを強化する必要があると感じた。それにより、次々と課題が明確になりアクション・リサーチがスムーズに進んでいくであろう。ジャーナルの書き方や資料の分析の仕方の工夫を考えたい。

(3)　協働的アクション・リサーチ体制の確立

個人での研究は限界があり、チームや同僚のサポートを活用した研究を行うことが望まれる。チームで進めることによって、自分の気づかない点が問われ、省察が深まり、互いに刺激を受け、より高次元の分析が進むと考える。

研修といえば言語や教科に関する知識や指導技術に焦点が当てられがちであるが、今回の研究講座をとおして、授業研究や改善を目的とすれば、アクション・リサーチによって自分の観察眼を鍛え、授業や生徒を見て様々な現象に気づくことと教員の内面を振り返る省察の訓練をした上で、態度の変容まで持っていくことの意義と重要性について考えることができた。学習者の自律(Learner autonomy)を育成するためには、教員の自律(Teacher autonomy)が不可欠である。まず自分の教育観や教育の全体像、勤務校や生徒の実態を見つめ、自己の英語力や指導力がどの程度かを分析し、長所や短所などをプロの職業人として振り返り、継続的に自己研鑽に励み、自分を高めていくことが大切である。それがとりもなおさず生徒に還元される。しかしながら、先述したように一人では限界もあり、日々の忙しさの中で充分な時間が取れないという現状も否定できない。従って、今回研修所で実施したような、仲間と行うプロジェクトが有効であろう。また、学校単位で、教科内で、個人レベルでいろんなアプローチが可能であろうが、今回の受講者の中には、学校内の英語科教員のチームワークで動くことにより、生徒の変化や教員の変化などに大きな進歩が見られたとの声もあり、大切な指摘だと考える。

今後も教員のネットワークを大切にしながら研究を継続していきたい。研究の助言・指導に当たっていただいた伊勢野教授、並びに熱心に取り組まれて成果を挙げられた受講の先生方に心から感謝申し上げたい。

引用・参考文献

1) 文部科学省「『英語が使える日本人』を育成するための戦略構想ー英語力・国語力増進プラン」(2002)
2) 同「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(2003)
3) 兵庫県教育委員会「美しい兵庫の教育を担う教職員のパワーアッププラン」(2002)
4) 泉惠美子「アクション・リサーチによる教授者の内的変化と授業改善の検証ー現職教員研修をとおしてー」『研究紀要 第113集』pp61-68 兵庫県立教育研修所 (2003)
5) Richards, J. & C. Lockhart. *Reflective Teaching in Second Language Classrooms.* Cambridge: Cambridge University Press. (1994)
・Baily, K., A. Curtis & D. Nunan. *Pursuing Professional Development.* Heinle & Heinle. Thomson Learning. (2001)
・Johnson, K & P. Golombek. *Teachers' Narrative Inquiry as Professional Development.* Cambridge: CUP. (2002)
・Wallace, M. J. *Action Research for Language Teachers.* Cambridge : CUP. (1998)

・佐野正之(編著)『アクション・リサーチのすすめ－新しい英語授業研究』英語教育 21 世紀叢書. 大修館書店 (2000)

参考資料１　指導案とジャーナル

Lesson Plan

Date:
Class: Number of Students: Boys: Girls: Total:
Textbook: Lesson:
Aim of this lesson:
Allotted Class Periods for this lesson:
This class is period of the allotted periods.

Objectives as Teacher:
(What are your personal objectives as teacher in this class?)
Objectives for Students:
(What do you want students to be able to do at the end of this class?)
Teaching Points:
(What teaching points are you going to focus on in this class?)

Procedures: (T activity, Ss activity, teaching material, teaching aids, etc.)	Time (How much time to spend for each activity)	Assumptions (Why do you decide to do what you are going to do?)	In-Class Observation (Write down whatever you noticed during the class.)

Journal after the lesson

(Take 10 to 15 minutes and write down how you feel after the lesson. Were you able to do what you intended to do? What do you think went well and what didn't?)

参考資料２　現在授業で悩んでいること、改善したいと思っていること

・生徒がやる気になる授業
・英語が苦手な生徒にでもがんばれる分野を作りたい
・英語が苦手な生徒や嫌いな生徒にどう教えるか
・授業で英語をできるだけ使おうとしているが、苦手な生徒にとっては面白くないようである
・生徒の意欲の引き出し方
・生徒の興味、関心を引く工夫のある授業
・英語に関する興味、関心をどのように高めるか
・生徒が英語に興味を持ち、どんどん英語を使って会話ができるような授業をめざしたい
・わかりやすい授業の展開方法
・わかる授業から使える授業・生徒の活動する授業にする（40 人で）
・教科書を使って英語力をつけるためにはどうするか
・「話す」「聞く」能力をつける授業をしたい
・基本を定着させるための工夫
・授業の進め方、教科書の扱い方
・英語の教授法について新鮮な手法
・授業のリズム、授業の組み立て
・単語・熟語の指導
・板書の改善
・シラバスをきちんと作って深みのある授業がしたい
・教科書をとおしていかにオーラル能力を高めるか
・英語の学習の必要性を感じていない生徒や受験の材料としてしかとらえていない生徒に対する指導
・受験との両立
・生徒の理解度と授業進度のバランス
・家庭学習の習慣がない生徒にどのように予習をさせるか
・実践的コミュニケーション能力を付ける授業がなかなかできない

参考資料３　研究テーマ

・日本語、空間、生徒指導の観点から
・自主的な活動をうながす英語授業を追及して
・英語学習における独学の勧め－コンピューターの有効利用－
・－魅力ある授業づくりをめざして－　英語Ⅱ授業改造計画
・効果的な音読活動を考える
・魅力的な授業を目指して
・聞くこと・話すことの学習活動をより多く取り入れた授業の展開をめざして
・予習・学習習慣の定着を目指して
・活気ある授業の雰囲気づくり
・わかりやすく楽しい授業の実践
・Encouraging Student Interaction in Reading
・生徒に正しい英文を書かせるために
・Action Research に基づく Reading 授業改善　－できること・できるところから始める－
・アクション・リサーチによるＯＣＡの授業改善－「息抜き」ＯＣＡから脱却し「英語に興味が持てる」ＯＣＡを目指して－
・①　学び合う集団作り　②　実践的コミュニケーション能力をつけ、さらに定期テストでよい結果を出す。

参考資料４　ジャーナルの分析

Students-centeredness, Empathy, Whole persons, Security（学習者中心、共感、全人、安心）

1　生徒に対する声のトーンに気を配るようになった。
2　Ms. Gは英語の授業中の声が小さいのを何とかしたいと思っています。あなたの対策は。（生徒へのアンケート項目）
3　大変謙虚な姿勢を持つことができた。簡単にいえば自分の授業評価を生徒にしてもらうこと。2学期末も必ず実施する。
4　みんなのレポートによい意見がたくさんありましたので、まとめてみました。
5　教材作成中もなんだか最近は生徒たちの喜ぶ顔見たさにやっているように思います。
6　生徒の意見をよく聞く。自分が変だと思ったら生徒も同じように感じている。
7　生徒の反応が気になり、良い意味でも悪い意味でも生徒を観察するようになった。

View of Language　（言語観）

1　「英語で」というのが英語の授業に必要なのがわかった。
2　数人の生徒が同じところで同じ間違いをしていることが多いのに気づいた。
3　（「訳」を生徒が欲しがるので）そこまで言うなら生徒に丸々訳をさせようか。（悩む、でもしない）
4　文字を見ないで聞く機会を増やす必要あり。（英語での口頭出題について）
5　先に訳を渡して音読に時間をかけるべきだと思う．日本語訳を目的とするのではなく、英語の表現や意味を直接覚えるようにする。
6　英語に興味が持てるような授業展開を目指し、定期考査で点数を取るためだけに、大学入試のためだけに授業展開をしない。

View of Teaching/Learning　（教授観、学習観）

1　分かりやすく、面白いCAを作り、楽しい授業にしていかなくてはいけないと思う。
2　教員が授業改善の意識を持つことで教員の意識が変わってくると思う。そしてそれが生徒に大きく影響するのだと思う。
3　「生徒にさせる」から生徒が「したがる」へ
4　生徒が学習した内容を覚えられるように説明をしっかりと行う→生徒自身が考えて理解する必要があると感じた。
5　（時間内に必死に一文を暗記しようとする生徒を見て）その様子は平常点だけにこだわっているようには見受けられなかった。英語が読めることが楽しいように私の目には映った。

Objectives as Teacher　（教員としての目標）

1　情意面での目標は？技術面に関する目標ばかりが目立った。
2　目標がいつも同じ。
3　一般的であるため達成度が判断しづらい。たとえば「英語を使う」という目標を立てる場合に、具体的な「せりふ」を考えて指導案に書き留めておけばその「せりふ」が使えたかどうかで達成度も判断しやすい。
4　目標の達成度は毎授業後にリフレクションをとおして評価し、次の目標を考える。

具体的事例

1　「これだけやれば100点に限りなく近い点数がとれる」プリントの作成を目指す。
2　教員に自信が無い所では早口になりがちである。教材研究は念入りに。

On-going/Structured Feedback and Interview　（フィードバック）

1　後で尋ねてみると内容は理解できたとのこと。英問英答しつつ、また英語で言い換えをしつつ充分理解できたことはよかった。
2　いつもなら分らないまま放っておく生徒も今日は向かいにペアの仲間がいるのでチェックしあったりして一生懸命やっていた。
3　なかなかうまく大きな声が出ている。
4　多くの生徒はマッピングがスピーキングの力をつけるのに大切であると気づき始めた。

In-class Modification　（授業中の意志決定）

1　ＣＤを一回聞かせれば十分と考えていたが生徒にとってはやはり難しいようで二回ＣＤを聞かすことになった。
2　隣同士でやりとりをするつもりだったが割愛した。
3　I thought I was speaking too fast.
4　Shadowingでは読みにくそうなのでrepeatingに変更して読んだ。

Logistics　（授業運営）

1　単語カードを教室に持っていくのを忘れて集中させられなかった。
2　ビデオを撮っていたので見直しができてよかった。
3　自分の頭の中が整理しきれていないのでノートを見ながらてんやわんやだった。（指導案の重要性）
4　声のトーンを下げることで生徒にある程度の開放感を与えているのかもしれない。
5　指導案の未消化が続く。欲張りすぎなのか。思ったように進めなくて悩む。
6　早口でなく聞き取りやすい授業を。

Self-fulfilling Prophecy & Teacher Expectation　（自己完結予言と教員の期待）

1　覚えてきていない生徒が多分いるから厳しく注意する。
2　難しいことをしても生徒はできないと考えていた。
3　生徒をランダムに指名してみたが、無意識のうちに生徒を選びながら当ててしまっていたかも知れない。